

31. 当科における壊死性軟部組織感染症の臨床的・細菌学的検討

皮膚科学

塚田鏡寿, 濱崎洋一郎, 西川聡一, 林 周次郎, 嶋岡弥生, 鈴木利宏, 簗持 淳

【目的】壊死性軟部組織感染症 (Necrotizing Soft Tissue Infections; 以下 NSTI) は, 壊死性筋膜炎・ガス壊疽といった軟部組織に広範囲な壊死性変化を生じる重症感染症の総称である。致死率が高い事でも知られ, 早期診断と外科的介入, 集中治療管理, 適切な抗菌薬選択が不可欠とされる。当科における過去の NSTI の臨床的検討を行い, 合併症や発症部位のほか, 初診時の重症度や検出菌種の傾向などを検討することを目的とした。

【方法】2010 年 1 月から 2015 年 6 月までに当科で治療を行った NSTI 症例で, 男 23 例, 女 12 例の合計 35 症例を対象とした。合併症, 発症部位, 画像所見, 検出菌種, 初診時の NSTI のリスク評価値として知られる LRINEC score を用いたスコアリング, SIRS 診断基準を用いて敗血症の有無の評価などを行った。

【結果】35 例中 28 例 (80%) が糖尿病を合併していた。下肢が全体の 60%, 次いで背部などの体幹部後面が 20% であった。90% 以上の症例が SIRS 診断基準を満たし敗血症を呈していた。LRINEC score は, 高リスク群とされる 8 以上は 51.4%, 境界群を含める 6 以上では 57.1% であった。単独感染と混合感染の割合はほぼ 1:1 であり, 単独感染では黄色ブドウ球菌が最多であるのに対し, 混合感染では連鎖球菌群が最も多くその他にも種々の菌種が検出された。各画像検査にて, 全例で浮腫あるいは軟部組織の炎症所見を認めたが, 膿瘍・ガス像といった所見が明らかだったのは全体の 75% であった。最終的に多くの症例で縫縮と植皮で創部を再建したが, 5 症例で患肢切断を余儀なくされた。尚, 当科では 35 例全例を救命し得ている。

【考察・結論】LRINEC score の低リスク群でも, NSTI の可能性は否定出来ないと考えられた。画像検査で NSTI が明らかでないこともあり, 早期試験切開の重要性を再確認した。SIRS 診断基準を正確に評価し, 敗血症の有無を確認することは実地診療に不可欠であり, 発症早期の重症化予測と迅速な対応につながると思われた。検出菌は様々であり, 治療開始前の適切な細菌培養検査が治療方針の選択に最重要であると考えた。

32. Oncology : Patient-Centered Care to Overcome Disease

医学部海外研修 (サンディエゴ・アメリカ)

¹⁾ 医学部 5 年, ²⁾ 基本医学語学・人文教育部門
横山翔平¹⁾, 石橋なぎさ¹⁾, 山口七夏¹⁾,
池田裕介¹⁾, 小野寺亜希子¹⁾, 佐藤 駿¹⁾,
菅原佑太¹⁾, 田端洋太¹⁾, 野崎布世¹⁾,
坂本洋子²⁾, William Hassett²⁾

今回私たちはアメリカ西海岸のカリフォルニア州サンディエゴにある UCSD (UC San Diego) で二週間研修させていただいた。私たちの研修は主に Moores Cancer Center (MCC) で行われた。そこで学んだ日本とは違う癌治療と予防, 緩和ケアについて特に印象的だった 4 つの方法を以下に記す。

一つ目は放射線腫瘍学である。放射線腫瘍学は外科腫瘍学, 内科腫瘍学と並び臨床腫瘍学の 3 本柱の一つで, 放射線腫瘍学には機能と形態の温存が可能な癌局所治療法であるという大きな特徴がある。単に命を長らえるだけではなく, 社会復帰を可能とする放射線腫瘍学はまさに現代の要求する癌治療法の一つであるといえる。

二つ目は精神腫瘍学である。精神的順応や行動が癌の予防, 診断, 治療から終末期まで大きく関わっていることも分かってきている。MCC では精神的なアプローチにより症状のコントロールや緩和ケアを行っていた。

三つ目は Writing 療法である。Writing には人々の不安を軽減させ, 気持ちを楽にさせる効果がある。この時大切なのは, 物語をつくるということであり, 自分の気持ちを起承転結に即して物語ることで Writing 本来の効果が十分に発揮される。日本人は古くから俳句や短歌といった感情を文章にすることで想いを伝える文化があるために, 馴染み深い治療法だと考えられる。

四つ目は催眠療法である。患者さんは癌に対する様々な不安や恐れを持っている。催眠療法は, まず患者さんをリラックスさせることで安らぎを与え, 患者さんの不安に耳を傾け, 少しでも病気に悩む患者さんの苦しみを取り除いている。

考察としては, アメリカでの癌の治療は, 様々なアプローチをすることで QOL を低下させないことに重点が置かれていたと感じた。癌という大きな壁にぶつかった患者に, 尊厳を守りつつどのように残りの人生を癌と共に生きるのか模索し導いていく医師の姿が MCC にはあった。